

小林多喜二 伝 補遺 2

倉 田 稔

も く じ

はじめに

- | | |
|----------------------------|------------------|
| 1 クロフォード | 2 西丘はくあ あて葉書 |
| 3 嶋田から | 4 宮沢賢治 |
| 5 多喜二の、佐々木キヨあるいはキヌとの恋 | |
| 6 多喜二の好きなもの | 7 辞令 |
| 8 三・一五前後 | 9 小樽風景 |
| 10 蟹と蟹缶詰 | 11 系図 |
| 12 多喜二住居跡 | 13 松田の思い出 1930年 |
| 14 反帝同盟，太宰治 | 15 1932年 |
| 16 一労働者の記事 | 17 志賀直哉 |
| 18 病院へ | 19 自宅で |
| 20 電報 | 21 解剖拒否 |
| 22 香典 | 23 「転換時代」＝「党生活者」 |
| 24 追悼公演 | 25 中条の大熊あて手紙 |
| 26 市立小樽文学館の、多喜二遺体写真の撤去 | |
| 27 小樽商科大学付属図書館の所蔵する多喜二の出版物 | |
| 28 フィールド講演 | 29 多喜二小説論 |
| 30 訂正 | |

はじめに

これは、「小林多喜二伝 補遺 1」（『人文研究』第 104 輯 2002 年 9 月）の続きである。作品番号としては（24）である。

1 ジョセフ・ユーリー・クロフォード

小樽の鉄道を作った人は、クロフォードである。クロフォードは、1842年、米国ペンシルヴェニア州に生まれた。ペンシルヴェニア大学とフィラデルフィアの工学院で土木の専門教育をうけた。卒業後、コールヒ炭鉱やミドルボールド炭鉱に炭鉱技師として、また連邦陸軍の土木技師にもなった。南北戦争で北軍大尉として土塁を築いた。終戦後、ペンシルヴェニア鉄道などの鉄道測量技師、建築監督となった。1869（明治2）年、クロフォードはアメリカ大陸鉄道の完成をした。明治11年12月、クロフォードは来日し、「到着の日から三年間、北海道の炭山の連絡する鉄道、ならびに車道建設兼土木顧問」となる。クロフォードは、明治12年2月に札幌にきた。3月から調査を開始し、幌内から札幌をへて小樽に鉄道をしくのが最も善いと結論づけた。難所は熊碓・銭函間の絶壁であった。6月、開拓使はクロフォードを技師長に任命し、彼は半年で札幌馬車道を開通させた。ついでアメリカへ戻り、鉄道資材や機関車を購入した。明治13年11月28日、手宮・札幌間の鉄道が開通した。弁慶号が時速20キロで走った。北海道で初めての鉄道であった。その後、札幌・幌内鉄道も開通し、明治14年11月、幌内炭鉱から小樽へ石炭が運ばれた。この年、クロフォードはアメリカへ帰国した。本国でも鉄道開発に腕を振るった。彼は、大正13年に亡くなった。

2 西丘はくあ あて葉書

多喜二の西丘はくあ あて葉書があり、小樽市文学館に所蔵されている。これは『全集』未収録である。

奥沢町 西岡理髪店内 西丘 はくあ 兄

[あて多喜二の郵便はがき]

(大正) 11・4・5 (消印) 小樽築港駅付近にて

小樽倶楽部で貴兄の詩を拝読して、ただただ感心しました。

一回は素描である作品を見ましたけれども、今から権威ある西條八十氏の手で一等であるとする、(人間心理の弱点か)尚あの時よりは秀れて思われるのです。

あの洗練された用語と、気分が一致して、物静かな、恰も貴兄の性格そのもの、やうな気持ちをうけるあの詩！ 西條八十が評されたやうに、物さびしい古笛の音のような詩！

私は幾度もその詩をかみわけかみわけて見ました。

すると、……また何かしら幽玄な神秘的な情

緒がありました。ある人は日本語は詩に

適しないと言ひましたが、私が貴兄

の詩を見てその論に何かしら

反対したい気持ち

なってきました。

私の創作は愚作で自分として

も期待しなかつたので

すが、せめて名前でも

といふやうな気持ちになりました。

× ×

貴兄は今お暇ぢありませんか、

いつか遊びに行きたいと思つてゐますが

どうでせう。今度私も築港停車場

のすぐ近くに移りましたから、いつでも

遊びに来ませんか、但しその前に、

ちょっと知らしてくれないと、

遊びに行つてゐるかも知れ

ませんから。

いつか行きますよ。

いゝですか。

西丘はくあは、ペンネームである。紺谷政雄が最初の本名である。彼は明治33年、石川県金沢市に、染物屋の次男として生まれた。金沢で、尋常、高等小学校を卒業した。その間、母が亡くなった。そして歌を作り始める。彼は郵便局員となったが、退職し、大正7年に父と共に小樽に来た。そこで番匠家の養子になった。彼は郵便局の事務員をし、夜、小樽稲穂商業補修学校に通った。大正8年庁商に入学した。短歌で小林多喜二らと同人となった。多喜二は大正5年に庁商に入学しているから、はくあは、3年おくらせていた。もっともはくあは多喜二よりも3歳年上である。彼は、大正9年、養家と不縁となり、8月から小樽市奥沢町1丁目、西岡徳蔵宅に世話になり、『群像』にも歌を出した。西岡徳蔵は理髪店の息子で、彼の同級生だった。多喜二の葉書はそれゆえこの時代である。つまり多喜二が小樽高商に入ったばかりの時であった。大正11年4月号の『小説倶楽部』に西丘の詩が一等に入選したと、若竹町にいた小林多喜二が店に来た⁽¹⁾。一方、当時の多喜二が投書した詩が第1席に入選し、はくあがその詩の批評をしたら、返事の葉書がはくあ宛にきた。ピッシリと細字できれいに書かれている葉書だった。西丘は後に、「彼のものはもうこれ一枚しかなくなっちゃってネ」と大事に秘蔵していた⁽²⁾。これがこの葉書であろう。大正12年9月、戸塚新太郎がまとめ役の『新樹』を西丘は発行した。片岡亮一、小林多喜二、西岡徳蔵らが関係した。また『霸王樹』小樽支社を結成し、幹事となった。大正13年、庁商を卒業し、山下汽船鋳業に入社し、三笠へ勤めに行った。大正15年に伊藤家と養子縁組をした。昭和2年に奈良姓となる。彼は主に幾春別に住んだ。鉱山職員から中学校の教師になった。昭和43年に亡くなった。その死後、『西丘はくあ歌

(1) 「西丘はくあ年譜」(『西丘はくあ歌集』原始林社 昭和43年、所収)より。

(2) 金坂吉晃「西丘はくあさんのこと」(『北線』2、北線社 滝川、昭和43(1968)年5月)11ページ。

集』が、原始林社から昭和43年に出た。

3 嶋田から

高商で多喜二は、大熊信行と武者小路実篤の「その妹」について話合った事があった。この頃の文壇は、菊地寛、里見弴、芥川、武者小路、志賀直哉らが活躍していて、嶋田や多喜二はよく読んだものだった。

1922年 嶋田正策は、小樽へ再転勤となった。多喜二の小説「龍介と乞食」が、この年の『小説倶楽部』3月号に発表されて、皆を驚かせた。彼は嶋田に言った。「俺は何でも小説にしてしまう。学校の試験でも非常に不合理な所がある。普段は出来ていても、試験当日、身体の調子が悪くて、良い成績が取れなかった場合は、受験者の本当の値打ちが判らない。それを小説にした。」しかしその小説は陽の目を見なかった⁽³⁾。

4 宮沢賢治

宮沢賢治は、明治29年に、岩手県花巻町に生まれた。北海道へは3回来た。初めは大正2年であり、県立盛岡中学の生徒との時代に、北海道修学旅行で来た。二度目は大正12年で、樺太旅行をし、従って北海道を通った。彼は、大正10年12月以来、稗貫農学校つまり花巻農学校の教諭であった。三度目は大正13年5月であり、花巻農学校の教諭として、統導者として農学校生徒を引率して、北海道修学旅行をした。帰着後、「修学旅行復命書」を提出したのである。この復命書は、大正13年5月19日から5月23日とされ、花巻農学校の24行用原稿用紙11枚に書かれている。復命書の冒頭である、小樽高商についての部分は、現代語にすれば、こうである。

(3) 嶋田正策「私の『自画像』を書いた頃」90ページ。

午前9時小樽駅に着いた。ただちに高等商業学校を参観した。案内によって各室を巡覧した。中にタイプライター練習室と、取引実習室の、諸会社銀行税関等の各金網をめぐるした小模型中における模擬紙幣による取引など、……甚だ生徒の興味を喚起した。商品標本室では粗なる農産製造品と精製商品の連絡について参考になるべきもの多く、殊にドイツの馬鈴薯を原料とした三十余種の商品標本、米国の各種穀物をあぶって膨張させた食品などに注意した。十時半同校を辞す。

つまり彼らは、計算すると約1時間、参観した。ここに出て来る取引実習室は、初代渡辺龍聖校長が考えたものであり、また商品標本室の一部資料は現存している。この頃、小樽高商は、第2代の伴房次郎校長の時代であり、有名な人物で言えば、小林多喜二が、一、二カ月前に卒業しており、伊藤整は三年生になったばかりであった。整が宮沢賢治と廊下ですれ違ったかもしれないと想像するのも、楽しいことである。

5 多喜二の、佐々木キヨあるいはキヌとの恋

北海道拓殖銀行の時代に、多喜二は、佐々木キヨ、あるいはキヌが好きになった。彼女は、銀行の同僚で、初め給仕で、後に事務員になった。彼女はきれいで、男を惹きつける、派手ずきな女性であった。多喜二は思い切って彼女の前ですべてを言い切る勇気がなく、「ちょっと実は話したいことがあるが、何処かで会ってくれないか」という手紙を渡した。彼女からは、「何処かで会って、そのためにとんでもないことを云われることはお互いに不利だと思います。もし書けることなら書いて下さい」という返事を貰った。多喜二は、1925年6月のある夜に、彼女を誘って、新富町のお祭りに、つまり龍徳寺境内の神社の祭りにいった。当時は現在よりも賑わっていた。2人でしめし合わせて会った。そしてキスを交わした。しかし彼女が憤み深い人でもなく、教会の男と一緒にふざけたりした。また他の男性とともに海水浴にゆき、とこれは熊碓の海岸であるが、ふざけちらして男に身体をもたせかけて、媚

態を示した⁽⁴⁾。ある時、多喜二の机に彼女が寄ってきて、「重複」か「重箱」か、重の字を聞いた。多喜二がその字を教えてやった時、「ああ、そう、男と女が重なるというあの字」といい、多喜二は幻滅を感じた⁽⁵⁾。お祭りに共に行った次の年、銀行で、佐々木に、「今夜はあすこのお祭りだなア」と云うと、「さようございませぬえ」と彼女は応じた。彼女は、後にはピアホールのウエイトレス、その後、飲み屋のおかみになった。佐々木の名は、多喜二の後の小説に出て来る。『党生活者』の主人公である。

6 多喜二の好きなもの

多喜二の好きなものは、食べ物としては、炊き立ての白米に塩鮭を細かくちぎってふりかけたもの。音楽では、ベートーヴェンのバイオリン・コンチェルト、ゲーテの詩によるチャイコフスキーの作曲「ただあこがれを知るもののみが」である。

7 辞令

北海道拓殖銀行の大正12年1月6日から大正12年12月31日の「辞令書割印簿」がある。それには、小林多喜二に対して「書記を命す 月俸七拾円 給与 総務部勤務を命す」（原文は旧字でカタカナ）とある。

8 三・一五前後

特別高等警察（略して、特高）は、1911年にできた。その前年1910年に大

⁽⁴⁾ 佐々木について多喜二は3つの小説を書いた。それらからの話だが、本人はそれらは実話だとしているから利用できる。

⁽⁵⁾ 布野栄一『小林多喜二の人と文学』翰林書房 2002年、12ページ。

逆事件があったのである。治安維持法制定（1925年）のときは、もめた。全国的には大反対運動が有り、新聞もいっせいに反対し、衆議院でもめて修正もされた。

翌1926年3月5日に、労働農民党が結成された。これは戦前の運動にとって重要である。1927（昭和2）年、金融恐慌が始まった。日本軍隊は、中国の漢口、上海に侵攻した。

1928年3月15日の事件で、特高が大拡充された。思想検事が設置され、治安維持法が改悪された。三・一五事件は、約1カ月後、4月11日に記事が解禁されたものである。この事件では、捜査当局が持っていた情報は莫然とした報告や聞込みにすぎなく、見込み捜査、捜査のための捜査の面が強かった⁽⁶⁾。約1600人の検挙者中、約450人が起訴された。だが特高は、渡辺政之輔、三田村、鍋山、市川、佐野学らの幹部の逮捕に失敗した。

1928年3月25日に、ナップが成立し、5月に『戦旗』創刊号がでた。

多喜二は、「人を殺す犬」が葉山の「セメント樽から出た手紙」と同じ位の作と思うと、書くのであった。

蔵原論文「生活組織としての芸術と無産階級」が、1928年4月に出た。5月号の『戦旗』で、蔵原の「プロレタリア・リアリズムへの道」がのった⁽⁷⁾。

多喜二は、この1928年5月13日ころ上京した。帰ってきた多喜二は、小説「一九二八年三月十五日」（以下、「三・一五」と略）を、1928年5月26日から書はじめ、5月27日に「監獄部屋」を書き終った。小説「三・一五」は、イタリア、フランス、ドイツ、イギリス、アメリカ、ロシアで知られた。

『一九二八年三月十五日』は、雑誌『戦旗』に発表される時から、相当の伏字がされたが、それでも雑誌は発売禁止にされ、商業ベース以外の独自の配布網で8千部を売った。翌年単行本『蟹工船』の中に入れられ、発売禁止となったが、別ルートで1万5千部を売った。翌年改訂版で出版された単行本

(6) 荻野富士夫『特高警察体制史』せきた書房 1988年 増補版、213ページ。

(7) 蔵原「……「三・一五」と「蟹工船」。

『一九二八年三月十五日』は、ただちに発売禁止となった⁽⁸⁾。

翌 1919 年 4 月 16 日事件（四・一六事件）では、小樽で 40 人が検挙され、多喜二も、4 月 20 日に小樽署に拘引され、家宅搜索を受けた。小樽の町で、「赤の連中が片っぱしからぶちこまれた……」と、ひそかな話題となった⁽⁹⁾。実際は 3・15 事件よりも、4・16 事件の方が運動の側では打撃が大きかった。昭和 4 年ころは、『戦旗』を読んでいるだけで特高につかまった。

9 小樽風景

蜂谷涼⁽¹⁰⁾『ちぎり屋』（講談社 2002 年）で大正時代の小樽を描いている。

小樽は北前船の寄港地でもあった。榎本武揚⁽¹¹⁾は、小樽にも農園やら貸し地を沢山もった。彼は幕軍だったが、新政府に乗り換えて、北海道開拓使や駐露特命全権大使など政府高官の階段をあがっていった。榎本は小樽で宅地造成をした。開拓使が廃止され、新官吏は官有物の払い下げを受けた。それで商売を始め、威張った。

日露戦争で樺太（サハリン）の開発が始まった。1905 年 6 月ポーツマス講話会議に先だって、日本は、あわよくば樺太全土を手に入れようと、樺太上陸作戦を開始した⁽¹²⁾。

藤山要吉は、廻船問屋から海運業に進出し、小樽と稚内へ航路、その後、北陸、下関、神戸、大阪、樺太と、航路を作った。漁場をもち、樺太の日本海側の多くをもった。留萌線を開業した。皇太子（＝昭和天皇）の宿泊のために宿（＝屋敷）をたてた。

第 1 次大戦（WW1）で欧州の穀倉地帯であるルーマニア、ハンガリー、オ

(8) 太田，稿，『秋田と小林多喜二』から。

(9) 石井，8 ページ。

(10) 彼には『海明け』（講談社）もある。

(11) 加茂儀一『榎本武揚』中央公論 1960 年。

(12) [琴坂]『ガイドブック 小林多喜二と小樽』新日本出版 1994 年 8 ページ。

ランダは焦土と化し、食糧を輸入に頼っていたイギリスは困った。日本はイギリスの同盟国だった。そこで北海道の澱粉、雑穀、豆類が輸出され、小樽は北海道の集積地だった。「澱粉王」は道内の馬鈴薯を買占め、イギリスから澱粉の注文が殺到した時、三井、湯浅、鈴木など大商社からの大量注文を一手に引き受けた。「小豆將軍」(＝高橋)は、小豆を買占め、高くなった所で売った。

輸出用の豆は、規格が厳しく定められたため、豆撰工場が建設中の運河のあたりに30軒近く現れた。6千人をこえる女工が働いた。日雇い男が1日40銭のところ、70-80銭稼ぐ人もでた。ビルマ豆、小豆、大福、中福、青えんどうを乗せた船が小樽から欧州へ向かった。船はたりず、藤山汽船、犬上汽船、酒井汽船、板谷商船が儲けた。豆成金、澱粉成金、船成金が出た。樺太開発の基地小樽もWW1の余波で好景気となり、樺太貿易も盛んになった。小樽は、横浜、神戸について、船主や廻船店の数で、全国3位となった。

10 蟹と蟹缶詰

日本は漁業国である⁽¹³⁾。北海道にも独得の漁業がある⁽¹⁴⁾。その中でも蟹漁は特異でもある。しかも全水産高に占める蟹生産高の比率は低く、最も比率の上昇した昭和10年でも3.8%であった。したがって生産額から見ると、蟹漁業は北海道漁業にとって余り重要ではないが、北海道で最初の動力船漁業であり、蟹缶詰工業で特殊な性格を持っていた。

蟹は魚類でなく甲殻類である。北海道では、タラバガニ(別名、イバラ蟹)、ズワイガニ、花咲(はなさき)ガニ、毛ガニ、が食べられている。タラバと花咲は、ヤドカリの仲間である。ズワイがに、花咲がに、タラバがに、毛がに、は、蟹の四天王といわれる。これらは明治時代から食べられた。タラバ

(13) 羽原又吉『日本漁業史』。

(14) 『北海道漁業史』。

は、鱈場と書き、鱈のとれる場所にいるからである。北海道の他では、有名なものでは、たかあしがに、わたりがに、松葉かに（ずわいがに、のオス）、越前かに、などがある。上海カニもある。

缶詰の原料とされるのは、タラバガニ、ズワイガニ、毛蟹である。

ズワイ蟹は、日本海沿岸と朝鮮半島に産し、十脚目短尾亜目イナックス科に属する。特に石川県、新潟県で、多数漁獲され、冬から春にかけてゆでて販売されている。毛蟹は、オホクリガニとも呼び、朝鮮東海岸、日本海沿岸、北海道釧路沿岸に分布し、十脚目短尾亜目アテレシクス科に属する。甲が栗の形をしているので、オホクリガニと呼ばれた。

タラバガニは、甲殻綱軟甲亜綱歪十脚目 歪尾亜目リトデス科に属する。タラバガニは、北海道、樺太、朝鮮、オホーツク海方面に分布し、前二者と全く種類が違う。特に品質、声価で、毛かい、ずわい蟹は、はるかにタラバガニに劣る⁽¹⁵⁾とされる。ただしそれは缶詰の場合である。ゆでて食べた場合は、毛蟹の方がおいしいという人もいる。普通、蟹の缶詰はタラバガニのそれである。タラバガニは、他の蟹類に比較して、著しく大きい。雄蟹の大きなものは、甲長22センチ、甲幅25センチ、脚を延ばして横に145センチ、体重4キロのものもある。ハサミ脚は常に右が大きく、第5脚は非常に小さく、甲の内側にかくされている。

タラバガニは、北海道、樺太の沿岸、オホーツク海の、寒冷的な深海に産する。これら沿岸にはいつも清冷な寒流が流れて、夏期でも水温は、摂氏3度を上がらない。普通海深20、30メートルの所に群集し、水温の上昇とともに沖合いに去る。漁業の時期は、地方によっては2月頃開始されるところもあるが、普通3月から11月までで、大体4、5月が最盛期である。

たらばがに刺網漁業は、大正4年3月、北海道漁業取締規則が公布されてから、許可漁業となった。

⁽¹⁵⁾ 産業経済調査所『蟹罐詰の話』昭和6年、1ページ。

大正以降の蟹漁業の生産高の推移では、昭和時代の方が多。また、生産地帯は、根室、宗谷であったが、昭和20年、南千島を失ったので、根室地方は生産高は微々たるものになった⁽¹⁶⁾。

蟹缶詰の発祥については、年が少し違うが、説がある。

北海道開拓使根室別海缶詰所の生徒・松村文四郎は、明治14(1881)年に釧路に出張し、蟹缶詰を製造し、同年東京で開かれた第2回内国勸業博覧会に同缶2つを出品した。これが日本で蟹缶詰の記録に初めて残っている⁽¹⁷⁾。明治17年、福井市の戸與三兵衛は、ズワイガニ缶詰を試製し、翌18年に成功した。

北海道では、明治20年ころ、高島郡の平田孝造、札幌の長谷川源之助らによってタラバガニ缶詰が試製されたが、事業化できなかった。その後、西川貞二郎が小樽と高島で着業したが、大成しなかった。事業としてのたらばがに缶詰は明治に北海道小樽で試みられ、明治33年ころ北上して利尻へ、明治38年には根室へ、明治39年には樺太にまで伸びた。蟹缶詰は明治25、6(1892、3)年のころ、西川貞次郎が小樽付近で創り、試作品が明治26(1893)年、英国コーウエル州で開催された漁業博覧会に出品された。これが蟹缶詰が製造された初めて、海外に出た初めでもあった。その後中絶していた。

わが国タラバ蟹缶詰を初めて事業化したのは、小樽である。そう越崎は書く。明治維新前、江州の西川家が高島や忍路漁場を請け負っていたが、請負制廃止後、西川貞二郎は、色々な事業をした。彼は蟹缶詰の先駆者で、すでに江州八幡町で缶詰製造を始めていたが、明治23(1890)年小樽堺町の西川支店裏手に分工場を設けて、蟹缶の製造を開始した。当時川崎船で漁獲したタラバ蟹は美味で、価格も雄蟹1パイ2銭5厘で、1パイの肉はよく1ポン

(16) 『北海道漁業史』北海道水産部漁業調整課編・発行 昭和32年、820ページ。

(17) 『北海道に於けるたらばがに漁業の変遷』財団法人北海道水産会 昭和32年2ページ。

ド缶 2 つを優にみたせた。製品は、1 ポンド缶 1 ケ売価 25 銭で、採算もとても有利であった。ただし事業は成功するにいたらなかった。明治 28 年の小樽大火で、彼は小樽を引き上げた。

西川の使用人松吉直兵衛は、後に蟹缶業を引き受け、大成しなかったが、硫酸紙を蟹缶に利用して缶の内側の変色を防いだ。(越崎)

明治 37 (1904) 年に、和泉庄蔵が根室で試製し、翌 38 年、千島・国後(くなしり)島で開業し、同時に碓氷勝三郎も同島で従事した。明治 40 年には米国への販路が成立した。明治 41 年には市場が好況となり、北海道の東海岸は国後島を中心とし、西海岸は利尻島鬼脇付近、北見、稚内方面、樺太西海岸にも同業者が出た。

カラフトでも明治 39 年から大戸與三郎、戸根禰市らが、同 42 年から北千島で渡辺藤作が着業した。樺太では群小蟹缶詰業者が多く、乱獲、競争のため、取締り規則が作られ、北海道では明治 43 年から許可制になった。

北見地方では、明治 37、8 年ころ、田中寅蔵、斉藤熊蔵らが、利尻島の鬼脇に着業してから急激に着業者が続出し、許可をうけた工場は 12 あった。利尻に工場が 10 あり、北海道庁のすすめで、そのうち 7 工場が合同して、利尻缶詰株式会社を設立したが、大正 15 年解散した。北見利尻の 17 工場が全部参加して、昭和 3 年に北海道漁業缶詰株式会社を設立し、これが隆盛をきわめた。

根室方面では、明治 37 年に和泉庄蔵が根室で蟹缶詰を試製し、翌 38 年には彼と碓氷勝三郎が古釜市で着業した。その後、着業者がふえ、他の地方を凌駕することになった。だが統合問題が起きる。

太平洋岸では、昭和 8 年、埜邑直次が厚岸工場を譲りうけ、翌年には 4 工場となり、昭和 10 年にはそのうち 3 工場が合同して太平洋合同缶詰株式会社となった。昭和 13 年には根室の 14 工場と太平洋岸の 4 工場が合同して、蟹缶詰合同株式会社になった。同社は太平洋側の 12 の毛蟹、花咲蟹缶詰工場が合同して花咲蟹合同缶詰株式会社を、昭和 15 年に合併した。

択捉島では、明治 43 年、3 工場が許可をうけた。大正 10 年、東海岸の 5

工場が合同して北海缶詰合資会社ができ、その後、小熊幸一郎の経営になり、東沢捉漁業株式会社になった。昭和16年には全合同といわれ、多くの工場が日本蟹缶詰株式会社に合同した⁽¹⁸⁾。

蟹缶詰は大正6年には、北海道と樺太で17万函であったが、蟹工船の勃興と、カムチャッカ方面での日魯漁業株式会社の進出で、生産額が増大するのである。蟹缶詰の生産額は次の通り。函は、1ポンド缶4ダース換算である⁽¹⁹⁾。

年	金額(万円)	生産函数	うち輸出高(万円)	輸出函数
大正 13 年	898	196601	489	127125
14 年	1173	260637	1006	217717
15 年	1784	396331	1252	278381
昭和 2 年	2140	523204	1466	381470
3 年	1872	497081	1857	508912
4 年	2094	538512	1671	399433
5 年	1986	584252	1448	390100

蟹缶詰は輸出の役割が大きい。主要消費地はアメリカ合衆国とイギリスである。昭和3年には輸出のうち、アメリカが56%、イギリスが33%、昭和4年に対アメリカが58%、イギリスが30%、昭和5年にアメリカが56%、イギリスが26%となった。日本の蟹輸出の競争相手はソ連であった。日本の主な蟹缶詰生産者は次である。

露領カムチャツカ半島	資本金 (万円)
日魯漁業株式会社 (東京)	4000
株式会社林兼商店 (下関)	1000

⁽¹⁸⁾ 蟹缶詰発達史編纂委員会編『蟹缶詰発達史』霞ヶ関書房。

⁽¹⁹⁾ 産業経済調査所『蟹缶詰の話』昭和6年。

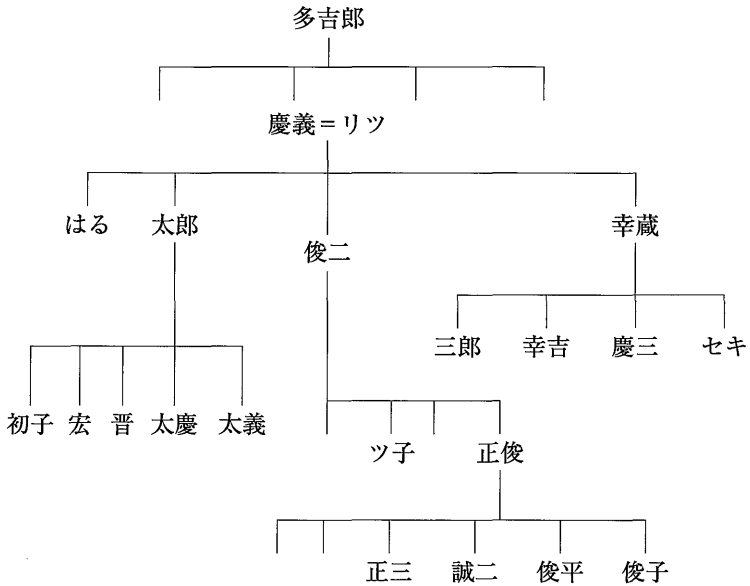
東和水産株式会社	(函館)	
工船蟹漁業		
日本工船漁業株式会社	(東京)	600
昭和工船漁業株式会社	(東京)	200
東工船株式会社	(東京)	190
株式会社林兼商店		
樺太		
樺太産業株式会社	(真岡) ⁽²⁰⁾	
北海道		
北海道漁業缶詰株式会社	(北見)	
株式会社藤野缶詰所	(根室)	
碓氷合名会社	(同)	
稲垣龍(丸三組)	(同)	
加隅良介	(同)	
北海道缶詰合資会社	(同)	
北千島		
千島漁業合資会社	(横浜)	
袴 信一郎	(函館)	

日本の製品はすべて、蟹缶詰生産業者全部の共同販売機関として設立された日本蟹缶詰共同販売株式会社(東京)の手をへて、内外取引商に売られた。

11 系図

長岡臣子さんからの手紙で、多喜二の伯父方の系図が知らされた。

⁽²⁰⁾ ホルムスク。



俊二が三星を継いだ。

12 多喜二住居跡標識

小林多喜二住宅の跡の記念碑は、撤去されたまま、復元されていない。折角、作ったのだから、置いて置くべきである。

多喜二の住所は、若竹町十八番地であるが、原籍は十一番地である。

電話番号については、昭和3年(1928年)4月1日現在で、当時の「電話番号簿」にはこうある。

小樽郵便局

3 4 4 8 小林幸蔵 新富町 五一 パン製造

3 3 5 1 小林多喜二 花園町西 四の二五 小林俊二方 銀行員

幸蔵も俊二も伯父・慶義の息子たちである。多喜二は電話を従兄弟の所に置いたことになる。当時人々は電話をほとんどひいていなかった。

13 1930年、松田の思い出

小林多喜二が上京したので、その歓迎会が開かれた。省線（今の JR）新宿駅から近い洋風喫茶店「白十字」、3月末ころの午後1時ころではなかったかと、松田は書く。明るい昼ころだった。時間厳守で、満席となった。すぐにコーヒーカップと洋菓子の皿が並べられ、会がはじまった。店の入口からすぐの、横に長くて奥行きは寸づまりという感じの部屋だった。その右端の席に江口かんが座り、そのすぐ横に多喜二は座った。江口が主催者として挨拶し、自分の横の多喜二を一同に紹介し、さらに一同の名なども言った。多喜二は、紺かすりの袴と羽織と兵古帯をしていた。全部で20人ほどが参加した。鹿地互、森山啓、上野壮夫、松田解子、その他、若い書き手であった。会は短い時間で終わった⁽²¹⁾。

多喜二は小樽から1人上京していたが、その後、小樽に残してきた母親を思って、友達と道を歩いている時、ふと立ち止まって、「今頃、おっ母さんは何をしているだろう」という人だった⁽²²⁾。

1930年秋9月、上野公園の自治会館で「戦旗防衛大演説会」が開催された。プロレタリア作家同盟やその他の文化芸術団体など共催したものらしい。この大集会での講演者は、小林多喜二を中心とする指導的メンバーであった。

⁽²¹⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」（『民主文学』2003年2月）135-6ページ。

⁽²²⁾ 「私たち働く婦人と小林多喜二」（『佐多稲子全集』第16巻 講談社 昭和55年）31ページ。

関鑑子の指揮で、プロレタリア音楽家同盟の女性たちの合唱がなされた。

くるめく わだち

走る 火花

鹿地互が翻訳した「ワルシャワ労働歌」を、河野テル子（鹿地互の最初の若妻）をはじめとする女性同盟員がうちそろって熱唱した。

この後、多喜二は検束された⁽²³⁾。

松田解子は、自分の書いた小説を徳永直にみてもらうために、当時の豪徳寺の宅へ行った。徳永は多喜二についていった。「あの小林という男、えらい作家だということは無論だが、同時にたまらなく愉快的男ですよ、松田さん。じつは、わたしのところでも、極く親しくしている元の印刷工その他に来てもらって一と晩くつろいだがる、彼、じつに漫談のうまい男でね。来た連中、ひと晩じゅう涙が出るほど笑い明かしたんですよ。酒はちょっとしか入らなかったのにあの若さで。あの小林という男、ちょっと無類の天才か知れないですよ」⁽²⁴⁾。

1931年の秋に、小林と宮本が、窪川鶴次郎、いね子夫妻の家へ遊びにきて、文学論をした⁽²⁵⁾。

14 反帝同盟，太宰治

小説家・太宰治は、昭和6年夏まで小山初代とともに東京の五反田1丁目に住み、すでに共産党シンパになり、連絡場所の提供をしていた。この五反田には軍需工場があり、東大セツルメントがあり、多喜二は、「オルグ」や「党

⁽²³⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」（『民主文学』2003年2月）137ページ。

⁽²⁴⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」（『民主文学』2003年2月）138ページ。

⁽²⁵⁾ 詳細は、「ある日の同志小林多喜二」（『佐多稲子全集』第16巻 講談社 昭和55年）62-3ページ。

生活者」の取材のために、労働者との会合をした。こうなると太宰の住居と多喜二の活動場所が非常に近かったことになる。太宰は反帝同盟に加盟し、多喜二は反帝同盟の執行委員になった。

反帝同盟とは、1927年にブリュッセルで開かれた反帝国主義・民族独立支持同盟という国際組織であり、その日本支部は1929年11月7日に結成された。

事実上、その反帝同盟の書記長で共産党グループの責任者でもあった谷川巖は、日本プロレタリア作家同盟選出の反帝同盟執行委員のある人と、会議でしばしば顔をあわせ、また定期的に街頭で連絡していた。以下、谷川の思い出による。

その人はあまり目立たないが、会議や連絡の時間はじつに正確で、おだやかななかに、どこかシンのある不屈さに、お互いに信頼しあっていた。ところが1933年2月20日かその直後か記憶がたしかでないが、かれが定期の連絡の場所に来なかった。不吉な予感におそわれながら、谷川は全身の神経を緊張させて、予備の連絡場所へ急いだが、とうとうそこにも姿を表さなかった。その翌朝だったか、新聞をひらいてみると「小林多喜二築地署で急死」という活字がとんびこんできた。その写真をみると、いままで会っていた人にまぎれもなかった。あれは小林多喜二さんだったのかというおどろきと、貴い同志の命をうばった敵にたいする怒りが、全身にこみあげてきた。

多喜二さんは、街頭連絡のときには、よく和服をきて、黒い二重まわしに、ソフト帽をかぶっていた。いつだったか、小がらなからだに似あわないステッキをもっていたことがあった。「イザというときには、これで、……」といつになく冗談めいてステッキをしごいてみせたりした。「かえって目立つよ」など注意したことを覚えている。たたかいの中の短いつきあいだったたが、小林多喜二ときとられるような話をついぞしたことがなかった。そんな素振りも感じられなかった。誠実そのもの……でした⁽²⁶⁾。

⁽²⁶⁾ 谷川巖「多喜二さんと反帝同盟」(『民主文学』号不明 84-5 ページ)

15 1932年

宮本百合子は次の事を書いている。これは小説ではないので利用できる。

1932年4月3日の晩、小林多喜二が宮本夫妻(=宮本顕治と百合子)の家に来た。そして、中野重治が戸塚署へ連行されたことを話した。それを作家同盟の事務所で多喜二は聞いてきた。宮本百合子は「原泉子はそれを知っているだろうか?」ときいた。中野の妻・原は左翼劇場の女優として働いている。「さあ、どうだろう、まだ知らないんでないか」。小林が特徴ある目つきと言葉つきで云った。「電話をかけてやるといいな。」百合子は原に電話をかけて戻った。小林多喜二は元気にしゃべって十時すぎ帰りがけに、玄関の格子の外へ立ったまま、内から彼を見送っている宮本夫妻に向い、「どうだね、こんな風は」と、ちょっと肱を張るようなかっこうをして見せた。彼は中折帽子をかぶり、小柄な着流しで風呂敷包を下げている。宮本顕治が、「なかなかいいよ。非常に村役場の書記めいていていいよ」と云った。「つまり小樽むきということだね、……じゃ、失敬」。夜気にあふれる笑声にむかって格子をしめ、小林は下駄の音を敷石にひびかせて去った⁽²⁷⁾。

1932年、作家同盟大会が築地小劇場で行なわれた。この時、多喜二はネクタイを結んだ普通の勤め人の姿だった。この大会で、多喜二はプロレタリア作家同盟の書記長として舞台上で報告した。その後も、議長団かなにかの大事の役で壇上にいたらしい。壇上からすぐの臨官⁽²⁸⁾席に築地署の制服制帽の特高警部が長剣片手に突いて腰掛けていた。多喜二は声高く報告したり、討論

(27) 宮本百合子「一九三二年の春」(『宮本百合子選集』第3巻、新日本出版社1968年)15-16ページ。

(28) 臨検は、特定の場所に立ち入って検査すること。臨監は、警察官が集会で席をもうけて監視すること。特高だけでなく全警察がやった。

した。その大会は全体として活気に満ちていた。多喜二の「報告中」にも、いかにたびたび参加者は、多喜二のおのずからなるユーモアにさそわれてふきだし笑いをしたり、かと思うと、シーンとして聞き耳を立てて熱心に聞きとった。

中条百合子も一般席で参加していた。彼女は1930年冬、湯浅芳子とともにソ連から帰朝していた。同盟に進んで参加した。和服であった。壇上からの報告や提案へ、てきぱきと補足意見などを出した。一方、自由労働者出身の堀田昇一という作家が、非常に怒りっぽく、感情的な質問を壇上にむかって繰り返した。会の活気がつのるたびに、臨官席から「弁士注意」の威嚇の声が発せられた。

大会が終ると、どっと場外にとび出した参加者は、固く腕を組み。デモさながらの列となって築地街頭をうねりだした⁽²⁹⁾。

松田解子、窪川いね子は、小林の馬橋の家を知っていた。いね子は、昭和7年3月以前、小林を尋ねて家へきた。蔵原惟廓は書く。「小林さんとは、二三度、それも惟人の関係でお逢ひしただけであるが、大変愉快的な、快活な、天真らんまんな人と思った。」⁽³⁰⁾

1932年の夏か秋、作家同盟横浜支部から、多喜二を中心とする文化講演会を開きたい、女性講師を含めてもらいたいという申し込みがあった。江口たちが大型車にのって出発した。歌舞伎座の真裏にある堀割り沿いの地点で、松田解子がかれらと落ち合って、その自動車に乗った。多喜二も乗っていた。江口と大宅壮一が後部の席にいた。赤ん坊をおぶった松田は多喜二の後に

⁽²⁹⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」（『民主文学』2003年2月）137-8ページ。

⁽³⁰⁾ 蔵原惟廓「民衆は真の代表者を一人失くした」（『大衆の友』号外 昭和8年3月10日）4ページ。

座った。大宅が自分の左前に座っている多喜二に、前以ての話題の続きをしかけた。

「で、さ、いまの例の『工場細胞』の女工のお君のことだけどき、あの、川っぶちで、同志でもあれば恋人でもある男に、まず自分が、かりっとかじったリングを、そのまま男に向けて、どう？ と差し出すね。あんなところなんか、ずいぶん読ませるじゃないか。そこで、おれ改めてききたいんだが、例の『瀧子其他』の瀧子と、君自身の馴れ染めはどうだったんだ」

「ふむ」

憤然そのものの表情で多喜二は大宅をふりむいて、「そういうことは読んだ本人が本人の想像力やら推理力、むしろ作品の鑑賞力そのもので慮るべきことで、何も作者に、……」という論理でちょうちょうはっし対していた。

横浜の会場についたのは日没ころで、横浜市郊外のさびしいくらいの活動写真館であった。松田は次男をおぶったまま壇上で「前座」をつとめた⁽³¹⁾。

16 一労働者の記事

『大衆の友』昭和8年3月10日、3ページに、「一労働者」の筆として「死ぬ覚悟で小説を書いた 同志小林多喜二を憶う」という記事がある。これは手塚英孝だろうと私は推測する。それによると、略、こうだ。(文中、たびたび同志と出てくるが、煩雑なために省略する。)

私が彼に初めて会ったのは、一年ばかり前である。実を言うと、私はこの勝れた人物を想像して何か堂々とした紳士(?)を思い浮べていた。会ってみると彼は丸切り予想と違った小男だった。私は初めは人違いではないかと思ったが、直ぐその事を話して大笑いをした。

⁽³¹⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」(『民主文学』2003年2月)139-40ページ。

彼は非常に親切で寛大だったが、仕事には実に厳格な、忠実な同志だった。彼は自ら先頭に立ち、範を示して、どんな困難にも、いささかもひるむことなく絶えず前進して、同志をはげまし、げきれいしていった指導者である。

小林は蔵原の最もよき後継者の一人であった。彼ほど蔵原から愛され、彼ほど蔵原を愛していた人はない……。彼は絶えず、蔵原の偉業を発展させなければならないと言っていたが、彼は実践を以てりっぱに果たした。殊に文化団体内の日和見主義との闘争に最も果敢に断固として先頭に立った。

小林ほど努力家は稀に思われる。彼は寸時の暇を惜しんで働いた。

彼は非合法になってから、2つの勝れた作がある。一つは、『改造』に発表された『地区の人々』、一つは未だ発表されていない。私はあれほど忙しい彼が何時の間に小説を書き上げるのか解らなかった。彼は自分の作品に対して非常に良心的な作家だった。『地区の人々』は旧作に較べて数段の進歩を示しているものであるが、小林には意に満たぬものがあつたらしい。時々彼は、その事を口にしてはいたが、最後の時も忘れることが出来なかつたらしい。彼は常に「死ぬ覚悟で書く者はないか」と言っていた。

17 志賀直哉

志賀直哉は多喜二が勾留中に、どうやって差入れをすればよいかを、『改造』の編集長に尋ねている⁽³²⁾。多喜二が虐殺された日は、志賀の誕生日だった。彼は日記で、多喜二事件への有名な感想を書いている。

18 病院へ

作家同盟の大宅壮一、貴司山治が、真っ先に多喜二の死を知り、江口渙、プロットの佐々木、親戚の小林、母などが、前田病院へ行き、21日午後9時

⁽³²⁾ 沢地久枝講演、小樽、2002.2.20

40分、多喜二の遺体を引き取った。虐殺の下手人・築地署特高主任・水谷は、この時親戚の人に言った。「格闘して道路に倒れたので、顔に幾分スリ傷がある。捕縄をかけられて来たので、首と両手にナハの跡がついている。死斑(紫のアザ)が幾分でているが心臓マヒとは関係ないから心配なく」そして、なお、「インテリというものは興奮しやすいから興奮から心臓マヒを起こす場合がある。小林の場合もそれで捕まる時に顔色が変わった。」など。

小林は街頭で格闘し倒れたというが、着ていたインバネスには泥一つついていず、着衣も裂けていなかった。遺骸の左右大腿部は無惨な暗紫居ろに皮下出血して腫れ上がり、急所である左右のコメカミ、後頭部に傷がある。

小林の母は顔を見なければ信じることが出来ぬと、屍を見るまで3時間一言も口をきかなかった。

19 自宅で

1933年2月21日。窪川いね子ら6人は、前田病院に電話をかけると、死体は自宅へ帰ったと言われた。午後11時、彼女らは小林の家へ急いだ。

玄関をあがると、左手の八畳の部屋がもとの小林の部屋である。江口かんが唐紙を開けてうなずいた。床の間の前に、布団の上に横たえられた姿、蒼ざめ、冷たくこはばっているその顔。彼女らは、そばへよった。安田博士が丁度小林の衣類を脱がせているところだった。人々の目は一斉に、その無残に皮下出血をした大腿部へそそがれた。みんな一様にああ！ と声をあげた。蒼白くこはばった両脚の太ももは、すっかり暗紫色に変じている。

おつ母さんが、ああッ、おおツとうなるように声をあげ、涙を流したまま小林のシャツを脱がせていた。中条はそれを手伝いながら、『おつ母さん、気を丈夫に持っていらっしやいね』

『ええ、大丈夫です』おつ母さんは握りしめているハンカチで、涙を両方へこすように拭いて、ははつ、おおつと声を上げた。『心臓が悪いつて、どこ心臓がわるい。うちの兄ちゃは、どこも心臓わるくねえです。心臓がわるけ

れば泳げねえのに、うちの兄ちゃんは子供の時から、よう泳いどつたんです。』

シャツの取りのぞかれた小林の脇の上にかがみ、蒼く静まったその胸を一杯になで廻した。

『はア、どこウ息つけんようになった。何も殺さないでもええことウ。はア、なんていふことをしたか。どこウ息つけんようになった。』おつ母さんは小林の苦痛のあと、迫害の跡を探すように力をいれて撫でた。絶えず口を衝いて出るおつ母さんの悲憤。おつ母さんは襟をかきわけてやり、今度は額を撫で、髪の毛をかき上げて、その小林の顔を抱えて、『それ、もう一度立たねか、みんなのためもう一度立たねか』さう言っつて自分の頬を小林の頬に押しつけてこすつた。自分で生んで、自分で育てた母親の愛情で小林の死顔を抱えて率直に頬をすり合わせた。押し上げる息で、おつ母さんは苦しうに胸が弱つて、はつツ、おつツと声を上げつづけた。涙を腹立たしさうにこすつては、また顔のうえにかがみ、小林のこめかみの傷を撫で、『ここを打つといふことがあるか。ここは命どころだ。はア ここ打てば誰でも死にますよ。』

それから咽喉の縄の跡を撫で、両頬にあるさるぐつわの跡を撫で廻した。しわを延ばすように力を入れてこすり、血を通はさうとするように。おつ母さんは、小林の顔に、胸に、足に、見るところ毎に、狂暴な手段の跡をはつきりと認めた⁽³³⁾。

20 電報

1933年2月21日 松田に、江口から、「コバ ヤシタキジ コロサル、二二ヒ、ゴゼン、コバ ヤシタキジ タクコイ、エグチ」という電報がきた⁽³⁴⁾。

⁽³³⁾ 窪川いね子「屍の上に」（『大衆の友』号外 昭和8年3月10日）3ページ。ここでの私の紹介は原文の文字通りではない。

⁽³⁴⁾ 松田解子「小林多喜二との出会いと生き方から何を学んだか」（『民主文学』2003年2月）141ページ。

21 解剖拒否

翌 22 日、小林の屍を解剖するために、慶応病院へ交渉した。電話をかける
と、「あッ、ちょっと待って下さい」と非常にあわてて、やや暫く待たせ、解
剖室の都合が悪いからお断わりしますと、断わった。帝大病院に小林の屍の
解剖を交渉すると、「此方ではそんな人はお断わりします」と言う。辞を低く
して「死後の内臓の変化を見て貰いたいから 是非おねがいます」という
と、「此方ではそんなことは一切お断わりします」といい、最後に「お前たち
は又そんなことを言って宣伝に利用するのだろう、馬鹿野郎！」と言って電
話を切った。

慈恵病院は「よろしうございます」と引受け、午後 1 時までにお持込み下
さいと、屍の名も聞かず承知した。1 時 30 分到着して、タンカで小使の案内
で解剖室へ運び込み、解剖台にのせた。

病理学教室の助教授大場勝利が安田博士を解剖室から呼び出し、研究室へ
入ったきり 30 分たっても出てこない。そのうち、若い小使監督のような者が
来て何故死体を運び込んだと叱りとばした。変に思って研究室へ行って見る
と、大場が解剖はできないと押しこわっている。

大場「第一、安田先生のお電話の時には肺炎だと言っていたのが、今伺いま
すと心臓マヒだというお話なので、それでは死因が違いますからお断わり
します。」

安田「そんなことは言いません。死亡診断書にある通り心臓マヒだと言いま
した。」

大場「お電話をおうけした助手がそう私につたえました。」

「肺炎なら解剖するが心臓マヒならやれないという特別な理由があります
か。」

大場「そういうわけではありませんが、まさか小林さんの御霊体とは思いま
せんでしたのでついああいうご返事を申し上げた次第です。」

安田「小林君の死体だと何故いかんのですか？」

大場「どうも平常から此の学校では警察関係のものは一切取り扱わないことになっております。」

江口「上は警視總監から下は巡査、小使に至るまで、警察関係は解剖しないのですか？」

大場「そういう意味ではないのですが、例えば、小林さんのような場合を言うのです」

江口がなおも突っ込んで、警察関係について追求すると、大場は、「本教室の伝統である」と言う。「そんな間違った伝統は破った方がいい」という江口の言葉に、「長年固く守って来ました伝統を私一個の所存ではどう致すことも出来ません。」と答えた。

安田「しかし名前も聞かずに引き受けておいて、死体を持ち込んでから断わるなんて非常に無責任極まる話ではないですか」

大場「それは一に此方の助手の手落ちでございまして、その点はただお詫び致すより外ございません。」

一同「やって下さるといふ御返事だったので、金のない連中が莫大な自動車費を使ってやってきたのですから、ぜひやって下さい」

大場「そうおっしゃられると、何とも申し様もございませんが……」

江口「じゃ、申し様のあるようにして下さいませんか」

布施弁護士事務所にはいた青柳盛雄弁護士は、多喜二の解剖の時に慈恵病院について来て、助教授が泣きながら、解剖を断わったら、「そんなら霊柩車の代金を弁償しろ」と居直った。私〔安田〕は彼のやくざのような言動にたまりかねて、「霊柩車の代金は私が弁償しますから、この場でそんなゆすりのような事を先方へ言わないで下さい」と押しとどめた⁽³⁵⁾。

大場「万事、助手の手落ちからかくなったのでございまして、助手さえもつと慎重に御事情をお尋ねしたら、こんなことはなかったのです。それも一

⁽³⁵⁾ 安田、103 ページ。

に私の身の不徳の致すところでごさいますて、お詫び致しますより外ございませぬ。」⁽³⁶⁾

慈恵病院では1時半から5時まで、このような押し問答をした。小林の屍はついに解剖を受けることが出来ずに、再び自宅へ運び返された。

22 香典

多喜二がなくなった時、葬式に香典が届けられた。親戚などを除外すれば、有名な人・団体には次がある。

15円 林房雄, 2円 河面仙四郎, 10円 改造社, 5円 小野宮吉, 並んで関鑑子, 5円 板垣直子, 10円 中央公論社, 2円 笹本寅, 10円 細田民樹, 6円 プロット, 5円 志賀直哉, 5円 田口タキ, 5円 寺田行雄, 3円 嶋田。その他、生花など。

23 「転換時代」＝「党生活者」

雑誌『中央公論』に「党生活者」つまり「転換時代」が載り、その広告が3月18日の『読売新聞』に出た。死の直後である。その文はこうある。「此歴史的傑作を発表する名誉を担ふ幸福を惟ひ給え。編輯者としては是以上の欣びがあろうか？ 校正しながら幾度泣いた事が判らない」（新字にかえた）。編集者の大変な意気込みである。

「党生活者」の伏字なしの校正刷りは、貴司山治（やまじ）から中野重治に渡され、戦時中ひそかに保存された。多喜二は『働く婦人』にも長編を書く約束だった。それは果たされなかった。

⁽³⁶⁾ 「経過報告」（『大衆の友』号外 昭和8年3月10日）2ページ。

24 追悼公演

小林多喜二追悼公演として、「沼尻村」が計画された。死を悼み、虐殺に抗議して、3月18日から30日まで、築地小劇場で、大沢幹夫脚色（4幕）岡倉士郎の演出で、新築地劇団によって上演されることになった。そのリーフレットによると、「時 一九三一・秋から冬へ 所 北海道沼尻村郁秋別炭山付近」と。

25 中条の大熊あて手紙

中条百合子は、昭和8年7月18日消印の手紙を毛筆で大熊信行に書いた。小林さんの全集刊行で「五十円ぐらゐ下さい」と頼んでいる。

26 市立小樽文学館の、多喜二遺体写真の撤去

小生は、月刊『らぶおたる』に、「市立小樽文学館の、多喜二遺体写真の撤去」として記事を書いた。そこでは私は撤去に反対した。

この問題はかなり問題と呼んだようで、『北海道新聞』の2002年4月22日の夕刊（11面、小樽・後志版）に、市立小樽文学館で、多喜二虐殺の写真外す、という標題の記事が出た。副題に、一月の紀宮さま訪問時、とある。

こういうことである。2002年、紀宮さまが北海道旅行で、市立小樽文学館（小樽市色内一）を訪問した際、同館が常設展示していた小林多喜二の虐殺の模様を伝える遺体写真のうち一枚を取り外していた、というのである。それが4月22日に分かった。この写真はその後展示されていない、とある。

市立小樽文学館長 亀井秀雄「小林多喜二「遺体写真」撤去について（『市立小樽文学館報』第26号、平成14年12月25日）が出た。そこにはこの件について、主に「小林多喜二住居跡を守る会」への応答であるが、説明がある。それよりも、同号編集後記で、ご遺族が掲示に賛成していないと書かれ

ていたのです、それならしかたないと、小生は考える。ただし紀宮様と関係ないとの前提でであるが。

27 小樽商科大学付属図書館の所蔵する多喜二の出版書物

小樽商科大学は、小林多喜二が卒業した学校であるが、その附属図書館は、小林多喜二の有名小説などの、古い版や初版をいくつか持っている。どんなものがあるだろうか。

1. 『蟹工船』

多喜二の最も有名な小説『蟹工船』の初版がある。これは戦旗社による一九二九年〔昭和四年〕九月の発行で、小説『一九二八年三月十五日』が共に入っている。

『蟹工船』の第三版もある。それは昭和五年三月一八日の出版で、日本プロレタリア作家叢書、とある。

第二版は、改訂版であり、一九二九年十一月発行で、『三・一五』が入っていないものであるが、これは、商大図書館にはない。だが第二版の一二月発行の一九版がある。一カ月で一九版も版を重ねたということは、大変な売れ行きであったことがわかる。

なお、改造社の『蟹工船 太陽のない町 鐵の話』初版、昭和六年五月、がある。

2. 『不在地主』

これは、北海道の富良野と小樽で起きた磯野農場の小作人争議を題材にした小説である。初め『中央公論』に載り、小林多喜二が当代一流の小説家と見なされたのであった。だがこの小説の発表がきっかけとなって、勤めていた北海道拓殖銀行を首になったという伝説が生まれた。

この『不在地主』の初版がある。昭和五年〔一九三〇年〕一月一五日印刷、

一月二十日発行である。それにまた、この第二七刷があり、それがまた印刷と発行とが同じ日である。つまり、少なくとも一度に二七刷が出たということになり、大変な売れ行きだったのだろう。

ついで、寄贈本がある。

3. 『一九二八年三月十五日』

これは第二版である。昭和五年五月十三日に出た。だが単行本としては初版である。前出の『蟹工船』の初版に、『三・一五』が入っており、それがいわば初版である。というわけで、初版もあるということになる。

4. 『工場細胞』

これは、小樽の運河沿いの製缶工場を舞台に、組合およびストライキ行動を描いた小説である。この『工場細胞』の初版がある。昭和五年七月四日、日本プロレタリア作家叢書である。多喜二の上京後に出版された。

5. 『転形期の人々』

これは、巨大なスケールをもって小樽の社会運動を描こうとした作品である。しかし著者の逮捕・虐殺によって中断され、用意していた大作の序論のみに終わった。これは、彼の死の直後出版された。

昭和八年五月一四日発行で、国際書房、初版である。

6. 『沼尻村』

戦旗社、昭和七年十二月十日発行の改訂版。初版の改訂版である。日本プロレタリア作家叢書、である。

7. 『オルグ』

小林多喜二は、上京一年後、「オルグ」を書き始めた。オルグとは、組織者の意である。これは、「工場細胞」の第二部の位置を占める。本書には、「独

房」も入っており、そこでは彼自身の経験が文学化されている。

昭和六年七月十八日発行。初版である。

8. 『地区の人々』

改造社。昭和八年五月八日発行の、改訂版。ここには、「沼尻村」、「安子」、「母たち」、「独房」が収録されている。

9. 『プロレタリア芸術教程』第2輯 世界社 昭和四年十一月

この本の冒頭論文として、小林多喜二の論文「プロレタリア文学の大衆化とプロレタリア・リアリズム」が入っている。

10. 『マルキシズムと宗教』大鳳閣 昭和五年五月五日発行 十日再版

小林多喜二の論文が入っている。

11. 『東俱知安行』

12. 『日和見主義に対する闘争』初版

13. 『勤労界』

『勤労界』創刊号 北方勤労界社 昭和四年十月二十日発行 発行兼編輯人 満田信太郎。

ここに論文「労働団体に対する資本家の武装論」が一八ページから二〇ページにある。執筆は「一記者」とあるが、二一ページには、「前頁の文を読みて」という文があり、それは「他喜志」とある。

本誌目次には論文の著者は直接、「他喜志」とある。この論文は小林多喜二が書いたという人がある。多分そうであろう。付加文の「前頁の文を読みて」は、小林多喜二の文であろう。これらは、『全集』未収録である。

14. 自筆文

『大杉栄論集 正義を求める心』アルス 大正十年八月一五日発行 大正十年十月五日 五版への多喜二の書きこみがある。

これは大杉栄 (1885-1923) の書であり、ここには「付録」があって、クロポトキンの「青年に訴ふ」がそれである。これは大杉の訳である。だがその10 [章] がほとんど削除されているので、小林多喜二が訳して書き込んだ。その訳文は、『小林多喜二全集』にほぼ再現されている。

15. 卒業論文コピー

小林多喜二は、小樽高商に卒業論文を提出した。その原本は今失われている。そのコピーが残されている。ただし他人の写しである。手塚英孝が書き移したとされている。その複写コピーである。

16. 英書 多喜二の小説の翻訳

“The Factory Ship” and “The Absentee Landlord” by Takiji Kobayashi, translated by Frank Motofuji. University of Tokyo Press, 1973.

(小樽商大図書館特殊資料室 Richard Storry 文庫にある。x/10.6/01576099346) 初版は 1933 International Publisher で発行。

The Cannery boat, and other Japanese short stories. by Takiji Kobayashi. Reprinted from the edition of 1933. New York AMS Press, 1970. v. 271p. (同図書館 S/9.3/2829/54118) (The Cannery Boat, The Fifteenth of March, 1928. For the Sake of the Citizens の3作が入っている。Takiji Kobayashi Murdered by Police の文がある。)

28 フィールド講演

ノーマ・フィールド (シカゴ大学) は講演で語った。2003年2月23日、小

樽。

作家の墓前祭は日本的であって、感慨深い。雪に降られて、写真でなく人物画が墓の後におかれ、墓前で帽子をとって、死者に語りかける、というのは。アメリカには文学館はない。

多喜二の壁小説は、カタカナしか読めない人に向かって書いた。

多喜二の英訳本、“The Factory Ship....”はWashington大学が要らなくなって手放した物を彼女が偶然入手した。

“The Cannery boat,...”では、「市民のために」、「蟹工船」は、まあまあの訳で、「三・一五」は、ひどい訳である。それに「蟹工船」と「三・一五」は短くなっている。訳者の日本語能力に欠陥があるが、しかしその気のある人が訳した。

「三・一五」は、初出と本物原稿とは違っている。多喜二の尊敬する蔵原が削れとって、彼は従った。『戦旗』のスタッフが手を入れている。

当時の運動では帝大出の人が多かった。

多喜二がヒューマニスティックな立場から革命的な立場に直線的に進歩した、というのではない。ヒューマニズムを乗り越えた、のでもない。彼は豊かな人間性と感性を失わなかった。

29 多喜二小説論

小林多喜二は、『蟹工船』の作家として有名である。あるいは、それが彼の主要作品だとされている。もちろん私はそれに反対しない。だが私は、普通の文学史や、文芸評論家がそう言うのと違って、「一九二八年三月十五日」の方がよいと思っている。この小説で彼の本質が現れたと、松田解子さんも言っている(1995年、小樽での講演)。本人の多喜二は、これが自分の処女作だと書いている。

彼は初め、自然主義の作家であった。ついで、リアリズム作家になった。

多喜二は、子供を描くのが、とてもうまい。私は彼の名作として、「救援ニュース No.18. 付録」を挙げたい。

プロレタリア文学は、一つのジャンルにすぎない。あらゆる文学の上を行く文学ではない。普通の文学に飽きてプロレタリア文学を読んだら面白い、というふうになれば、結構である。プロレタリア小説は、恋愛小説、推理小説などに並ぶ1つのジャンルである。実際は、いくつかの例外を除けば、それらにさえ並べない現状であるが。プロレタリア文学は面白くないと言われる。小林多喜二や宮本百合子、徳永直、葉山嘉樹らは、面白いとされる。しかし普通は彼ら以外は、面白さは落ちると見なされているようだ。

だがプロレタリア文学の面白さは2つある。1つは、人間の現実生活を興味深く描いた場合である。もう1つは、面白さそれ自体である。つまり話の面白さ、ストーリーの面白さである。例えば、秘密の労働組合とか、前衛党、ストライキ、スパイの暗躍、警察との駆引きなどは、ストーリー自体としても面白い。ある例外を除けば、小説はとにかくストーリーが手に汗を握るようなものでなくてはならない。その点で、19世紀フランスの小説は小説の模範である。日本の小説は、概してこれに欠けている。小林多喜二の小説はしかし、ストーリー性という点では、かなり面白い。日本の小説の中では、比較的面白い。ただしストーリー豊かな外国の小説には、負けてしまう。

それはもちろん日本の文学の世界の影響かもしれない。ストーリーの点では、日本文学はなにしろつまらない。その代表は、日本最大の作家、夏目漱石の小説である。「坊っちゃん」や「心」を除けば、ほとんどストーリーはない。あるとしてもそのストーリー性は大したことがない。ここで私は夏目を非難しているわけではない。夏目は日本人の心性を描いたので、大作家になった。

小林多喜二の小説は、私小説と社会小説に分かれる。有名な作品の中では、「一九二八年三月十五日」「蟹工船」「不在地主」「防雪林」は後者である。「党生活者」「東俱知安行」「独房」は私小説である。多喜二はどちらの小説がうまいかというのは、一概には言えない。両方ともうまいと言えるだろう。

初期の時代あるいは習作を書いている時代は、ほぼ私小説作家だった。身

辺に起きたことを丁寧に描いてゆくというものだった。だが社会派になってから、彼の才能が開花した。そうなると思小説的小説もうまくなっていった、と言える。

大熊信行の論評に関して言ってみよう。高商時代に多喜二は、天才のひらめきはなかった、また「思想」もなかった、という指摘である。もちろん大熊は、後年の多喜二と彼の文学を高く評価することにやぶさかではない。これは、高商時代の多喜二文学への評価であり、またこれはあたっている。彼のいう「天才のひらめき」は多喜二にはなかった。ある意味では、後年の多喜二にもなかった。多喜二文学はそういう種類とは違っている。そして高商時代には「まだ方向があたえられず」（大熊）にいたことも確かである。

文学を内向型と外向型に分ければ、多喜二文学は外向型である。後年の夏目漱石に見られるように、心理描写をする内向型にたいして、多喜二は外界を描く。描く外界が意味があり、重大な場合には、小説が成功するだろう。彼が修業時代に選んだ外界は、売春問題であった。デビューするころから選んだ題材は、労働者運動である。時代と、彼の選んだ題材の衝撃性と面白さとのために、彼は有名になり、作家として成功した。

30 小林多喜二伝 補遺1の訂正

- p.21 6行目 石田 興平→石田 興平
 p.27 5行目 阪神電鉄→阪神急行電鉄（阪急電鉄）
 p.27 11行目 坂東妻三郎→阪東妻三郎
 p.29 下から3行目 シナリア→シナリオ

石井氏、高村先生のご指摘。

注にあげられていた「朝日新聞」の特集99・10・13は、北海道版らしい

田中氏のご指摘。

(追記) 小生は『小林多喜二伝』論創社、を準備している。
 本稿の記述の一部は同書に入る予定である。